

大学生における完全主義の2側面に関する検討

Two dimensions of perfectionism and their relation with depression in Japanese university students

大高 志歩*・田上 恭子**

Shiho OTAKA*・Kyoko TAGAMI**

要 旨

完全主義の構造についてはこれまで数々論じられており、精神的問題と正の関連がある側面と負の関連がある側面の2つの側面があることが示されてきている。本研究では、日本人大学生を対象に、先行研究の知見をまとめ提唱された概念的な2要因モデルについて、確認的因子分析によって検証することを目的とし、完全主義に関する4尺度及び精神的健康上の問題の指標としての抑うつ尺度を含む質問紙調査を実施した。結果、概念的に提唱された“達成努力”と“評価的関心”の2要因モデルの適合度がもっともあてはまりがよいことが示された。そして抑うつ傾向との相関分析の結果、“評価的関心”と抑うつ傾向との間には有意な正の相関が認められたが、“達成努力”と抑うつ傾向との間に有意な関連は見出されなかった。このことから、完全主義の中でも、精神的健康には関連しない側面と、精神的健康を悪化させる可能性のある側面があることが示唆された。

キーワード：完全主義，達成努力，評価的関心，抑うつ

1. 問題と目的

1.1. 完全主義とは

完全主義(perfectionism)は古くより“神経質な(neurotic)”といった文脈で登場し、特に抑うつとの関連からその問題が認識され(Adler, 1956; Horney, 1950), 絶望感や不安, 摂食障害, 強迫性障害など, 多くの精神的問題との関連が認められてきた。

この完全主義の概念は曖昧で捉えにくいことがかねてより指摘されてきた。“完全を求める”という点においては共通しており(大谷, 2010), 過度に高い基準を自分に課すことが完全主義の中心の特徴として強調されてきたという指摘もあるが(Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate, 1990), 完全主義の定義は研究者によって異なり, 同意が得られているものはないとされている(Flett & Hewitt, 2002)。

たとえば, Hollender (1965) は, 完全主義をある水準の遂行を求めているだけでなく, 完全に至らないことはなんでも受け入れられない, あるいは満足できない人で, 自己陶酔的な満足感ではなく, 他人からの承認を得ようとする人と記述した。Burns (1980) は完

全主義者をその人の持つ目標は範囲や理性を超えて高く, そのような実現不可能な目標に向かって強迫的かつ絶え間なく懸命に努力し, 自分自身の価値を生産性や成果によって評価する傾向であると記述した。Frost et al. (1990) は完全主義をあまりにも批判的に自分自身の行動を評価する傾向を伴った過度に高い遂行基準を設定することと定義した。

わが国では辻(1992)が“完全性を常に希求し, 完全性という評価基準をシヴィアに自己に適用しながら, なおかつ高い自己評価を維持しようとする人格傾向”(p.4)と定義し, そのような完全主義者は“事故が常に完全であることを希求し, 現実自己がこの完全性の基準から少しでも逸脱すると, 自己を許すことができず, 自己評価を高めることを熱望しながら, 低い自己評価しか持つことができないというジレンマに陥ってしまう”(p.4)と述べている。

このように完全主義の定義は様々であるが, 一般に好ましくない問題的な特性だと考えられているといえる。

* 弘前大学教育学部学校教育教員養成課程発達心理学選修

Developmental Psychology Course, Teacher Training Division, Faculty of Education, Hirosaki University

** 弘前大学教育学部学校教育(教育心理学)講座

Department of School Education (Educational Psychology), Faculty of Education, Hirosaki University

1.2. 完全主義の測定

完全主義の定義が研究者間で異なっているということもあり、それぞれの定義を背景とした完全主義尺度が発達してきた。

Burns (1980) は、完全主義を単一の次元としてとらえ、10項目からなる尺度を構成した。その後、欧米では完全主義を多次元的にとらえる2つの尺度がほぼ同時期に開発された。1つはFrost et al. (1990) によって、もう1つはHewitt & Flett (1991a) によるものである。両者によって開発された2つの尺度は多次元完全主義尺度 (Multidimensional Perfectionism Scale: MPS) という同一の名前を持ち、欧米の完全主義研究において頻繁に用いられ、二大尺度となっているが、完全主義の捉え方には違いがある。

Frost et al. (1990) はこれまで完全主義の中心的特点として強調されてきた自己に過度に高い基準を設定することに加え、完全主義に関する多くの知見をもとにいくつかの特徴をまとめ、多側面的に完全主義を捉えている。ミスに対して過度な懸念を抱くこと、自分のパフォーマンスの質について漠然とした疑いを持つこと、親が自分に達成できない基準を設定していると思うこと、親が自分に批判的だと思うこと、秩序と整頓を好む傾向を完全主義の特徴とした。そしてこれらをもとに6下位尺度からなる完全主義尺度 (以下 FMPS) を開発した。

Hewitt & Flett (1991a) は完全主義がこれまで“自己に向けられるもの”として単次元的に扱われてきた (e.g., Burns, 1980) と指摘し、完全主義を新たな3つの視点から捉えている。これらの3つの視点の違いは、完全主義が誰に、どのように向けられているかによる。1つ目は“自己志向的完全主義 (Self-Oriented Perfectionism)”である。これは自分に骨の折れる基準を設定し、動機的な構成要素も含む。この動機は失敗を回避するために励むこと、努力において完全を成し遂げることを目指して励むことによってもたらされる。2つ目は“他者志向的完全主義 (Other-Oriented Perfectionism)”である。これは他者のできる能力に関する信念と期待を含み、重要な他者へ非現実的な基準を課す傾向である。完全主義的な行動が外へ (自己ではなく他者へ) 向けられているという点で自己志向的完全主義と異なっている。3つ目は“社会規定的完全主義 (Social-Prescribed Perfectionism)”である。これは重要な他者によって定められた基準と期待を達成する必要があると思ってしまうものである。自分にとって重要な他者が自分に非現実的な基準を抱いてい

て、評価も厳しく、完璧であるようにと圧力をかけていると社会規定的完全主義者は思うのである。これらの異なる視点から完全主義を捉えた3下位尺度からなる完全主義尺度 (以下 HMPS) を開発した。

また、欧米ではこれら2尺度に加え、The Almost Perfectionism Scale-Revised (Slaney, Rice, Mobley, Trippi, & Ashby, 2001; 以下 APS-R), Flett, Hewitt, Boucher, Davidson, & Munro (2000) の尺度 (The Child and Adolescent Perfectionism Scale; 以下 CAPS) も用いられている (DiBartolo & Rendón, 2012)。APS-R は“要求水準 (Standards)”, “秩序 (Order)”, “不一致 (Discrepancy)”の3下位尺度からなる。CAPS は児童と青年用に作られたもので、“自己志向的完全主義”及び“社会規定的完全主義”の2下位尺度からなる。

我が国では、辻 (1992) の完全主義尺度、桜井・大谷 (1997) の新完全主義尺度 (Multidimensional Self-Oriented Perfectionism Scale; 以下 MSPS) がある。MSPS は自己志向的完全主義尺度ともよばれ、我が国の完全主義研究において広く用いられてきた。この尺度はHewitt & Flett (1991a) の“自己志向的完全主義”に焦点を当て、Frost et al. (1990) の尺度を参考に作られている。“高い自分に目標を課する傾向”, “ミス (失敗) を過度に気にする傾向”, “自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向”の3下位尺度に、“完全でありたいという欲求”尺度が独自に加えられた4下位尺度からなるものである。また、大谷・桜井 (1995) によって HMPS 日本語版が、Nakano (2009) によって APS-R 日本語版が開発されている。FMPS や CAPS の日本語版は、筆者の知る限り今のところ存在していない。

我が国においては頻繁に自己志向的完全主義尺度 (桜井・大谷, 1997) が用いられ、データが蓄積されてきているが、最近この尺度については下位尺度の内的一貫性の低さや、原版通りの因子構造が再現されないなどの報告もなされている (福井・山下, 2012)。自己志向的完全主義に焦点が当てられる理由として、自己志向的完全主義が完全主義の典型であるという主張、および自己志向的完全主義が精神的問題と結びつきやすいという主張が挙げられる (e.g., 辻, 1992; 桜井・大谷, 1997; 大谷, 2010)。しかし、精神的問題との関連という観点からいえば、社会規定的完全主義に関しても頻繁に報告がなされている (e.g., Hewitt & Flett, 1991b; 大谷・桜井, 1995; 東, 2007)。また、辻 (1992) では“Hewitt & Flett のように対人関係まで枠組みを拡大すると、より多くの問題との関連付けがしやすくなることは確かである。また、完全主義は対人的な相互

作用によって軽快あるいは憎悪しうる力動的なものだということも明瞭になる”(p.12)と述べられていることから、自己志向的完全主義に限定せずに、広く完全主義について検討を行う必要があると考えられる。

1.3. 完全主義と精神的健康との関連

以上のような完全主義尺度を用いて、精神的健康に関連する様々な指標との関連が検討されてきた。たとえば、Frost et al. (1990) は女子大学生を対象に FMPS を用いて心理的指標との関連を検討したところ、“失敗懸念”、“行動疑念”は抑うつや不安などの精神的問題と正の相関が認められ、加えて、“失敗懸念”、“行動疑念”、“両親の批判”、“両親の期待”は強迫傾向と有意な正の相関がみられた。“秩序”は先延ばし傾向とは有意な負の相関が見られた。また、“自己への高基準設定”は先延ばし傾向と有意な負の相関がみられ、効力感と有意な正の相関がみられた。このことから、Frost et al. (1990) では“自己への高基準設定”は必ずしも問題的な特性ではないとされ、その他の5下位尺度はネガティブな特性を測定するものとしてみなされている。

Hewitt & Flett (1991b) は単極性うつ病患者、不安障害患者、健常者を対象に HMPS を用いて完全主義と抑うつ及び不安との関連を検討した。その結果、単極性うつ病患者群は他の2群よりも“自己志向的完全主義”において高い得点を示した。また、単極性うつ病患者群及び不安障害患者は“社会規定的完全主義”得点において同程度であり、健常者よりも高かった。全ての対象者にまたがって尺度間の相関をみたところ、“自己志向的完全主義”と“社会規定的完全主義”は抑うつ及び不安と有意な正の相関がみられ、“他者志向的完全主義”得点はいずれとも有意な相関は認められなかった。

このように、多角的に捉えた完全主義と精神的健康との関連に関する研究が数多く行われるようになり、精神的問題と関連する完全主義の問題的な側面と、そうではない、好ましい側面の2つの面が存在すると現在では考えられるようになってきている。

1.4. 完全主義の2側面

完全主義の2側面について、先行研究の表現をまとめると、1つは“適応的な”、“ポジティブな”といった言葉で表され、もう1つは“不適応的な”、“ネガティブな”といった言葉で表されている(伊藤, 2004; 大谷, 2004, 2010; 桜井・大谷, 1997)。このように大

きく2つの側面があるということはほぼ同意が得られているものの、こういった見解を踏まえた完全主義の構造の検討、またそれを明確に測定する方法は未だ確立されていない(Flett & Hewitt, 2002)。DiBartolo & Rendón (2012) は、様々な多次元完全主義尺度がこれまでの研究に用いられてきたが、完全主義の非常に重要な特徴については一致がみられているとして、2要因モデルを概念モデルとして提示した。そして完全主義の2要因に関する研究(Bieling, Israeli, & Antony, 2004; Cox, Enns, & Clara, 2002; Dunkley, Zuroff, & Blankstein, 2003; Frost, Heimberg, Holt, Mattia, & Neubauer, 1993; Pearson & Gleaves, 2006)をまとめ、完全主義尺度の各下位尺度が完全主義の2要因のどの範囲にあるのかを示している。DiBartolo & Rendón (2012) は完全主義のひとつ目の要因を自己に対して高い基準を課する“達成努力(Achievement Striving)”とし、もう1つを、自分自身あるいは他者の期待に背くことや、失敗に関連した自己批判に焦点を当てる“評価的関心(Evaluative Concerns)”とした。

DiBartolo & Rendón (2012) で示されているような完全主義の2要因モデルを最初に示したのはFrost et al. (1993)である。Frost et al. (1993) は、FMPS と HMPS という、完全主義の概念においていくらか異なる2つの尺度にはいくつかの類似性があるのではないかと考え、大学生を対象とした調査データについて探索的因子分析を実行した。その結果、FMPS の“失敗懸念”、“両親の期待”、“両親の批判”、“行動疑念”下位尺度、HMPS の“社会規定的完全主義”下位尺度が“不適応的評価的関心(Maladaptive Evaluation Concerns)”を構成し、FMPS の“自己への高基準設定”、“秩序”下位尺度、HMPS の“自己志向的完全主義”、“他者志向的完全主義”下位尺度が“肯定的努力(Positive Striving)”を構成した。“不適応的評価的関心”については、抑うつ及びネガティブ感情と有意な正の相関が認められ、一方“肯定的努力”はポジティブ感情とのみ有意な正の相関が認められ、抑うつ及びネガティブ感情との相関はみられなかった。

この研究の後、さまざまな完全主義尺度を用いた他の研究においても2要因モデルが確認的因子分析で見出されてきた。Bieling et al. (2004) は完全主義に関する3つのモデルを考案し、大学生を対象に FMPS 及び HMPS を用いて確認的因子分析により検証を行った。結果、Frost et al. (1993) で見出されたものと同様の2要因モデルの適合度が最も良いことを示した。Dunkley et al. (2003) も大学生を対象に FMPS, HMPS につい

て確認的因子分析を行い、ポジティブで適応的とされる“自己への高基準設定完全主義 (Personal Standards Perfectionism)”と、ネガティブで不適応的とされる“自己批判的完全主義 (Self-Critical Perfectionism)”の2要因を見出した。Cox et al. (2002) もまた、完全主義の2要因構造が、HMPSとFMPSの項目から確認されるかどうかを決めるために、学生群と臨床群を対象に確認的因子分析を行い、HMPSの“社会志向的完全主義”下位尺度と、FMPSの“失敗懸念”、“行動疑念”、“両親の批判”下位尺度で構成される不適応的完全主義と、FMPSの“自己への高基準設定”と“秩序”下位尺度と、HMPSの“自己志向的完全主義”下位尺度で構成される適応的完全主義を見出した。

Pearson & Gleaves (2006) は完全主義と摂食障害との関連を検討する中で、完全主義が単次元なのか多次元なのかを検証し、FMPS, HMPS, APS-Rなどの完全主義尺度を用いて、6因子からなるモデルを見出した。その中で完全主義については、“神経症的完全主義 (Neurotic Perfectionism)”, “標準的完全主義 (Normal Perfectionism)”, “秩序 (Order)”の3因子が見出されている。

2要因モデル (DiBartolo & Rendón, 2012) におけるCAPSの分析は、詳細な記述はみられないものの、McCreary, Joiner, Schmidt, & Ialongo (2004) に基づくものと考えられる。McCreary et al. (2004) はアフリカ系アメリカ人の児童を対象に、CAPSを用いて完全主義の構造と精神的問題との関連を検討した。因子分析の結果、社会規定的完全主義、自己志向的完全主義 - 批判、自己志向的完全主義 - 努力が見出され、前者2下位尺度は不適応的傾向、後者は適応的傾向として記述され、完全主義の2要因モデルと適合しているといえる。

わが国でも完全主義の2側面に関する研究が行われてきたが、自己志向的完全主義のみを対象としているものが多い (伊藤, 2003, 2004; 大谷, 2004; 桜井・大谷, 1997)。完全主義の構造を明らかにし、精神的問題との関係を明らかにするためには、FMPSやCAPSなども含め、広く検討することが必要であると考えられる。

1.5. 本研究の目的

以上より、本研究では広く完全主義を捉えようと考えられる、FMPS, HMPS, APS-R, CAPSの完全主義尺度を用い、DiBartolo & Rendón (2012) の“達成努力”、“評価的関心”の2要因を想定する概念モデルを検証

することを目的とする。比較モデルとして、先行研究に基づき、完全主義を1因子として考えるモデル、“秩序”を加えた3因子モデルについても併せ、確認的因子分析により検討を行う。また、精神的健康の指標として、今日の学生の問題のひとつとして挙げられ (林, 1988)、完全主義との関連の報告が多い抑うつ傾向をとりあげ、完全主義の2側面との関連を検討することを第2の目的とする。

2. 方法

2.1. 対象

大学生279名に質問紙調査を実施した。有効回答273 (男性120名, 女性153) を分析対象とした。

2.2. 質問紙構成

- ① FMPS (Frost et al., 1990) : 35項目を翻訳し用いた。“失敗懸念”、“自己への高基準設定”、“行動疑念”、“両親の批判”、“両親の期待”、“秩序”の6下位尺度からなる5件法尺度。
- ② HMPS 日本語版 (大谷・桜井, 1995) : “自己志向的完全主義”、“他者志向的完全主義”、“社会規定的完全主義”の3下位尺度45項目からなる7件法尺度である。
- ③ APS-R 日本語版 (Nakano, 2009) : “行動と要求水準の不一致”、“高い要求水準”、“秩序と整頓”の3下位尺度23項目7件法の尺度である。
- ④ CAPS (Flett et al., 2000) : 子どもと青年に対する“自己志向的完全主義 (12項目)”尺度及び“社会規定的完全主義 (10項目)”尺度を翻訳して用いた。7件法尺度。
- ⑤ 自己評定式抑うつ性尺度 (SDS) 日本語版 (福田・小林, 1997) : 抑うつ傾向を測定するために用いた抑うつ尺度である。20項目4件法。

2.3. 手続き

回答は任意であることを伝え、講義時間を利用して質問紙を配布し、即日回収あるいは翌週の講義開始前に回収した。

3. 結果

3.1. FMPSの因子分析

フロア効果のみられた7項目を除いた28項目に対して、最尤法、Promax回転による探索的因子分析を行った。複数因子に高い負荷量を示した項目、十分な因子負荷量を示さなかった項目を除き、繰り返し分析

を行った結果、26項目について6因子が抽出された。最終的分析結果を表1に示す。Frost et al. (1990) とほぼ同様の因子構造であり、Frost et al. (1990) に倣い第1因子から、“失敗懸念” (9項目, $\alpha = .85$), “高目標設定” (5項目, $\alpha = .81$), “秩序” (6項目, $\alpha = .81$), “行動疑念” (2項目, $\alpha = .79$), “親の批判” (2項目, $\alpha = .82$), “親の期待” (2項目, $\alpha = .72$) と命名した。確認的因子分析を行ったところ, GFI=.909, AGFI=.877, CFI=.961, RMSEA=.039であった。

3.2. CAPS の因子分析

フロア効果のみられた6項目を除き、16項目に対して、最尤法、Promax 回転による因子分析を行った。因子数については固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮し、2因子と設定した。最終的な因子分析結果(14項目2因子)を表2に示す。Flett et al. (2000) にほぼ類似した結果となり、Flett et al. (2000) に倣い、第1因子を“自己に求める完全主義”(8項目, $\alpha = .88$), 第2因子を“周りから求められている完全主義”(6項目, $\alpha = .87$) と命名した。確認的因子分析の結

表1 FMPS の因子分析結果 (最尤法, Promax 回転)

項 目	I	II	III	IV	V	VI
I 失敗懸念 ($\alpha = .85$)						
もし他人と同じようにできなかったら、それは私が劣った人間であるということである。	.87	-.03	-.20	.05	.02	-.09
もしミスをしたら、人はおそらく私を軽んじるだろう。	.81	-.19	.04	-.04	-.11	.04
もしいつも上手くいかなかったら、人は私を尊敬しないだろう。	.73	-.03	-.04	-.03	.04	.03
もし誰かが学校や仕事で自分よりも上手く課題をやったら、私はその課題全てに失敗したように感じる。	.63	.16	.07	.03	-.03	.01
ミスが少なければ少ないほど、人は私を好きになるだろう。	.55	-.10	.01	.11	-.07	.12
もし私が少しでも失敗したら、それは完全に失敗したも同然だ。	.53	.08	.67	.04	.16	.03
あらゆることにおいて自分が有能であることが、私にとって重要だ。	.50	.13	-.05	-.17	.02	-.04
もしミスをしたら、私はきつとうろたえるだろう。	.44	-.12	.17	.19	-.11	-.04
単純な日々の出来事について、いつも疑いを持つ。	.36	.07	.05	-.04	.13	-.04
II 高目標設定 ($\alpha = .81$)						
私はたいいていの人よりも高い目標を設定する。	.02	.83	-.08	-.02	.00	.11
私は極めて高い目標を持っている。	-.13	.79	.02	.14	-.01	.00
私は目標の達成に向けて努力することがとても得意である。	-.18	.65	.02	.01	-.06	-.05
何事においてもベストに至らないことは嫌いだ。	.02	.57	.10	.17	.13	-.01
私はたいいていの人よりも日々の課題でうまくやれることを期待している。	.26	.47	.10	-.14	-.07	-.03
III 秩序 ($\alpha = .81$)						
私はきちんとした人間でありたい。	-.00	-.05	.78	.00	.06	-.14
きちんとしていることは私にとってとても重要だ。	.03	.04	.74	.01	.10	-.09
秩序は私にとってとても重要だ。	.01	-.13	.64	.07	.06	.13
私は几帳面な人間でありたい。	.11	.06	.58	.00	-.00	.00
私は几帳面な人間である。	-.02	.16	.49	-.06	-.13	.11
私はきちんとした人間である。	-.13	.15	.49	-.14	-.18	.04
IV 行動疑念 ($\alpha = .79$)						
何かを正確に行うのに時間がかかる。	.03	.12	-.08	.87	-.05	-.05
ある行為を何度も繰り返してしまうので、作業が遅れてしまいがちだ。	.06	-.02	.05	.73	.00	.04
V 親の批判 ($\alpha = .82$)						
私は一度も親の期待に応えられたように思えたことはなかった。	-.04	.00	.04	-.08	.92	-.05
私は一度も親の課する基準を満たしたように思えたことはなかった。	.04	-.08	-.03	.04	.72	.13
VI 親の期待 ($\alpha = .72$)						
親は、私の将来について私よりも高い期待をいつも抱いていた。	-.01	.01	-.04	.07	.00	.78
親は私にとっても高い基準を課する。	.04	.03	.01	-.10	.05	.69
因子間相関						
I	—	.48	.50	.37	.48	.47
II		—	.58	.06	.02	.25
III			—	.11	.10	.21
IV				—	.19	.14
V					—	.47
VI						—

表2 CAPSの因子分析結果(最尤法, Promax 回転)

項 目	I	II
I 自己に求める完全主義 ($\alpha = .88$)		
あらゆる事において私は最高でありたい。	.83	-.09
あらゆる事において私は完璧であろうとする。	.83	-.09
何かをする時、それは完璧でなければならない。	.81	.05
もし私がいつも最善を尽くせなければ、そのことが気になってしまう。	.69	.01
私は最高であろうとしているわけではない。	.66	-.11
私はいつでも最善を尽くさなければならないという気がする。	.63	-.01
もし自分の作業で1つでもミスがあれば私はいらいらする。	.55	.11
私はいつもテストで1番であろうとする。	.52	.19
II 周りから求められている完全主義 ($\alpha = .87$)		
周りの人はいつも私に完璧であることを期待する。	.02	.87
周囲の人は何事においても卓越していることを私に期待する。	.05	.86
人は私ができることよりも多くのことを私に期待する。	-.19	.73
人は私にあまりに多くのことを求めすぎていると思う。	-.10	.71
私はいつも他人より優れていることを期待されている。	.13	.63
私の先生は私の作業が完璧であることを当然のこととして期待している。	.20	.55
因子間相関	I II	— —

表3 各尺度間の相関分析結果

	FMPS						HMPS			APS-R			CAPS		SDS
	CM	PS	O	D	PC	PE	SPP	OOP	SOP	DISC	HS	ORG	spp	sop	
FMPS															
CM	—														
PS	.46**	—													
O	.45**	.54**	—												
D	.36**	.15*	.11	—											
PC	.38**	.01	.07	.12*	—										
PE	.39**	.21**	.17**	.12	.40**	—									
HMPS															
SPP	.64**	.32**	.37**	.20**	.32**	.56**	—								
OOP	.35**	.45**	.34**	.13*	.02	.20**	.38**	—							
SOP	.62**	.75**	.64**	.23**	.07	.20**	.40**	.53**	—						
APS-R															
DISC	.62**	.35**	.33**	.30**	.49**	.28**	.45**	.25**	.45**	—					
HS	.45**	.77**	.56**	.12*	-.01	.13*	.27**	.38**	.79**	.36**	—				
ORG	.33**	.42**	.74**	.11	.03	.09	.26**	.26**	.53**	.28**	.52**	—			
CAPS															
spp	.52**	.36**	.32**	.12	.23**	.48**	.74**	.33**	.36**	.36**	.32**	.23**	—		
sop	.58**	.62**	.51**	.24**	.10	.19**	.36**	.41**	.80**	.39**	.64**	.45**	.43**	—	
SDS	.42**	-.06	.01	.28**	.31**	.17**	.28**	.08	.09	.37**	-.08	.02	.15*	.14*	—

* $p < .05$ ** $p < .01$

FMPS: CM「失敗懸念」, PS「高目標設定」, O「秩序」, D「行動疑念」, PC「親の批判」, PE「親の期待」

HMPS: SPP「社会規定的完全主義」, OOP「他者志向的完全主義」, SOP「自己志向的完全主義」

APS-R: DISC「行動と要求水準の不一致」, HS「高い要求水準」, ORG「秩序・整頓」

CAPS: sop「自己に求める完全主義」, spp「周りから求められている完全主義」

果, 適合度指標は $GFI=.953$, $AGFI=.923$, $CFI=.983$, $RMSEA=.043$ であった。

3.3. 完全主義の2側面に関するモデルの検討

はじめに, HMPS 及び APS-R について確認的因子分析を行った。結果, HMPS についての適合度指標は, $GFI=.839$, $AGFI=.798$, $CFI=.919$, $RMSEA=.042$ であり, “自己志向的完全主義” $\alpha = .91$, “社会規定的

完全主義” $\alpha = .82$, “他者志向的完全主義” $\alpha = .79$ であった。APS-R についての適合度指標は, $GFI=.912$, $AGFI=.871$, $CFI=.958$, $RMSEA=.045$ であり, “高い要求水準” $\alpha = .80$, “秩序と整頓” $\alpha = .71$, “行動と要求水準の不一致” $\alpha = .81$ だった。

次に各尺度の下位尺度ごとに合計値を算出し, 尺度間の相関係数を算出した。表3に示す。

完全主義の2側面に関するモデルの検討として, ま

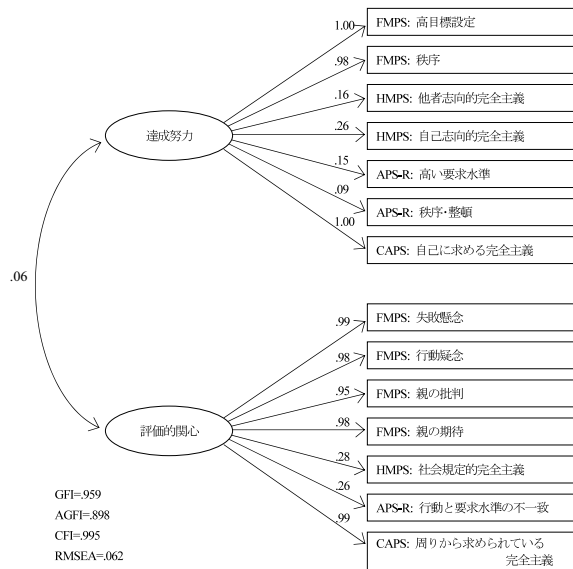


図1 2要因モデルについての確認的因子分析結果

注) 誤差変数の図示は省略した。パス係数は全て $p < .01$

ず DiBartolo & Rendón (2012) の“達成努力”“評価的関心”の2つを潜在変数とする2要因モデルをモデル1とし、確認的因子分析を行った。前者の観測変数としては、FMPSの“高目標設定”、“秩序”、HMPSの“自己志向的完全主義”、“他者志向的完全主義”、APS-Rの“高い要求水準”、“秩序・整頓”、CAPSの“自己に求める完全主義”の7下位尺度得点とした。後者については、FMPSの“失敗懸念”、“行動懸念”、“親の批判”、“親の期待”、HMPSの“社会規定的完全主義”、APS-Rの“行動と要求水準の不一致”、CAPSの“周りから求められている完全主義”の7下位尺度得点を観測変数とした。モデル1の適合度指標は、GFI=.959, AGFI=.898, CFI=.995, RMSEA=.062であった。パス図を図1に示す。

比較検討のため、モデル2として完全主義を1要因の潜在変数とする1要因モデルを想定した。またモデル3として、“達成努力”、“評価的関心”の2変数に“秩序・整頓”を加えた3つを潜在変数とする3要因モデルを想定した。“秩序・整頓”の観測変数は、FMPSの“秩序”とAPS-Rの“秩序・整頓”とし、それ以外は2要因モデルと同様であった。モデル2の適合度指標は、GFI=.943, AGFI=.883, CFI=.992, RMSEA=.069, モデル3についてはGFI=.953, AGFI=.887, CFI=.993, RMSEA=.067であった。

3.4. 完全主義の2側面と抑うつ傾向との関連

完全主義の“達成努力”、“評価的関心”の2側面と抑うつ傾向との相関を求めた。表4に示した通り、抑

表4 完全主義の2側面と抑うつとの相関関係

	完全主義		
	達成努力	評価的関心	抑うつ
完全主義			
達成努力	—		
評価的関心	.69**	—	
抑うつ	.07	.19**	—

* $p < .05$ ** $p < .01$

うつ傾向と評価的関心との間には有意な正の相関($r = .19, p < .01$)が認められた。一方、達成努力との間には有意な相関は認められなかった($r = .07, ns$)。

4. 考 察

4.1. 因子分析結果について

本研究では、Frost et al. (1990) のFMPS, Flett et al. (2000) のCAPSを翻訳し、因子構造の検討及び信頼性の検討を行った。共に先行研究の因子構造とほぼ対応した構造が得られ、確認的因子分析の適合度指標も十分な値が得られたと考えられ、概ね高い信頼性も確認されたと考えられる。

4.2. 完全主義の2側面に関するモデルの検討

本研究ではDiBartolo & Rendón (2012)の概念的モデルを検証することを目的とし、Bieling et al. (2004)及びPearson & Gleaves (2006)を踏まえモデルの比較検討を行った。

各モデルの適合度をみると、いずれのモデルもある程度十分な値が得られたと考えられ、適合は概ね妥当と考えられるだろう。各モデルの適合度を比較的にみると、わずかな差ではあるが2要因モデルが最も高い値となっており、あてはまりが最も良いと考えられる。前述の通り、完全主義の定義は研究者間で異なり、測度もさまざまだが、先行研究において述べられてきたように、2つの側面に分けられるといえるだろう。

4.3. 完全主義の2側面と抑うつ傾向との関連

完全主義の2側面のうち“達成努力”の側面は抑うつ傾向との関連がみられず、“評価的関心”は抑うつと有意な正の相関が認められた。つまり、評価的関心が高まれば抑うつ傾向も高まるということが示唆される。従来、“適応的”“ポジティブな”完全主義や“不適応的”“ネガティブな”完全主義といったことばで

表されてきたように、“達成努力”と“評価的関心”という完全主義の2側面は精神的健康上の問題との関連という視点からも異なっているということが示されたといえよう。すなわち、完全主義が全般的に精神的問題に関連するのではなく、精神的健康上の問題を高める可能性のある側面と、精神的健康には関連しない側面とが存在することが示唆される。

4. 4. まとめと今後の課題

本研究では、Frost et al. (1990) 及び Flett et al. (2000) の完全主義尺度 (FMPS, CAPS) を翻訳し、DiBartolo & Rendón (2012) の完全主義の2側面、“達成努力”と“評価的関心”についての概念的モデルを確認的因子分析を用いて検証し、精神的問題の1指標としての抑うつ傾向との関係を検討した。翻訳したFMPS, CAPSの2尺度それぞれ、先行研究と同様の因子構造が妥当であると考えられ、概ね高い信頼性も得られたと考えられる。完全主義のモデルについては2側面についてのモデルのあてはまりが最も良く、DiBartolo & Rendón (2012) のモデルは検証されたと考えられ、精神的問題と関連する1側面と関連しない側面とに分かれることが示唆された。

ただし、今後の課題として以下の3点が挙げられよう。

1点目としては、翻訳した2尺度のさらなる検討の必要性が考えられる。本研究では両尺度ともフロア効果による削除項目がやや多く、FMPSについては項目数の少ない下位尺度が多くなった。翻訳の問題も含め、今後さらに項目内容を見直し、妥当性、信頼性について検討を重ねる必要があるだろう。

2点目としては、完全主義の2側面についてのさらなる検討が挙げられる。本研究で確認された2側面を構成する下位尺度の中には推定値の低いものも含まれていた。また概念的に完全主義に含めることが妥当かどうか疑問の残るものもある。たとえばFMPSの“行動疑念”はそもそも強迫性障害の測度に基づいて構成されているため、完全主義の一部として捉えるのではなく強迫性障害の症状として捉えるほうが適切であるという指摘もある (Shafran & Mansell, 2002)。今後はそのような指摘も考慮し、完全主義の構造についてのさらなる精緻な検討が必要であると考えられる。

3点目としては、精神的問題との関連についての今後さらに広い検討の必要性が挙げられる。本研究では、精神的問題の中で抑うつ傾向との関連しか検討していない。たとえば、“達成努力”に含まれると考え

られる“高目標設定”は自己効力感との関連が見出されている (Frost et al., 1990)。今後は自尊感情や自己効力感といった精神的健康との関連もあわせて検討することで、より詳しく完全主義の2側面の様相が浮かび上がってくるだろう。

引用文献

- Adler, A. (1956). The neurotic disposition. In H. L. Ansbacher, & R. R. Ansbacher (Eds.), *The individual psychology of Alfred Adler*. New York: Harper. Pp.239-262.
- Bieling, P. J., Israeli, A. L., & Antony, M. M. (2004). Is perfectionism good, bad, or both? Examining models of the perfectionism construct. *Personality and Individual Differences*, **36**, 1373-1385.
- Burns, D. D. (1980). The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today*, November, 34-52.
- Cox, B. L., Enns, M. W., & Clara, I. P. (2002). The multidimensional structure of perfectionism in clinically distressed and college student samples. *Psychological Assessment*, **14**, 365-373.
- DiBartolo, P. M., & Rendón, M. J. (2012). A critical examination of the construct of perfectionism and its relationship to mental health in Asian and African Americans using a cross-cultural framework. *Clinical Psychology Review*, **32**, 139-152.
- Dunkley, D. M., Zuroff, D. C., & Blankstein, K. R. (2003). Self-critical perfectionism and daily affect: Dispositional and situational influences on stress and coping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 234-252.
- Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (Eds.) (2002). *Perfectionism: Theory, research, and treatment*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Boucher, D. J., Davidson, L. A., & Munro, Y. (2000). The Child and Adolescent Perfection Scale: Development, validation, and association with adjustment. Unpublished manuscript.
- Frost, R. O., Heimberg, R. G., Holt, C. S., Mattia, J. I., & Neubauer, A. L. (1993). A comparison of two measures of perfectionism. *Personality and Individual Differences*, **14**, 119-126.
- Frost, R. O., Marten, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, **14**, 449-468.
- 福井義一・山下由紀子 (2012). 自己志向的完全主義尺度の因子構造と項目構成の再検討 甲南大学紀要, 文学編, **162**, 117-127.
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- 林潔 (1988). 学生の抑うつ傾向の検討 カウンセリング研究, **20**, 162-169.

- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991a). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 456-470.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991b). Dimensions of perfectionism in unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 98-101.
- 東真由美 (2007). 完全主義と不適応との関連 京都教育大学教育実践研究紀要, **7**, 111-119.
- Hollender, M. H. (1965). Perfectionism. *Comprehensive Psychiatry*, **6**, 94-103.
- Horney, K. (1950). *Neurosis and human growth*. New York: Noton.
- 伊藤菜穂子 (2003). ポジティブ・ネガティブな完全主義の相互作用の効果 日本大学心理学研究, **24**, 29-35.
- 伊藤菜穂子 (2004). 不適切な動機による完全主義が心理的不適応に及ぼす影響 心理臨床学研究, **22**, 542-551.
- McCreary, B. T., Joiner, T. E., Schimidt, N. B., & Ialongo, N. S. (2004). The structure and correlates of perfectionism in African American children. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, **33**, 313-324.
- Nakano, K. (2009). Perfectionism, self-efficacy, and depression: Preliminary analysis of the Japanese version of the Almost Perfect Scale-Revised. *Psychological Reports*, **104**, 896-908.
- 大谷保和 (2004). 自己志向的完全主義の2側面と自己評価的抑うつ傾向の関連の検討—統制不可能事態への対処を媒介として— 心理学研究, **75**, 199-206.
- 大谷保和 (2010). 自己に向けられた完全主義の心理学 風間書房
- 大谷佳子・桜井茂男 (1995). 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **66**, 41-17.
- Pearson, C. A., & Gleaves, D. H. (2006). The multiple dimensions of perfectionism and their relation with eating disorder features. *Personality and Individual Differences*, **41**, 225-235.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **68**, 179-186.
- Shafran, R., & Mansell, W. (2001). Perfectionism and psychopathology: A review of research and treatment. *Clinical Psychology Review*, **21**, 879-906.
- Slaney, R. B., Rice, K. G., Mobley, M., Trippi, J., & Ashby, J. S. (2001). The Revised Almost Perfect Scale. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **34**, 130-145.
- 辻平次郎 (1992). 完全主義の構造とその測定尺度の作成 甲南女子大学人間科学年報, **17**, 1-14.
- (2013. 1. 7 受理)